

---

# あの子にウソをついた日

女郎花

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

あの子にウソをついた日

### 【Nコード】

N1153S

### 【作者名】

女郎花

### 【あらすじ】

エイプリルフルールということとで、ちょっとした切ないお話を書いてみました。

もういいかい？

いつもの見慣れた道路。この公園の前を通り過ぎると、必ず思い出してしまうことがある。幼かった頃の苦い思い出だ。忘れようと思っても、中々忘れられない。

「なー、そーいや今日って」

車の助手席で、なにやらCDの束を漁っている友人がそう声掛けてきた。実は自分は、そう言われる前から気付いている。4月1日、自分の一番嫌いな日。

なぜ嫌いなのか。それはこの世で自分しか知らないだろう。何故なら、ウソをつかれたあの子はきっと今でも気付いていないかもしれないからだ。

\*\*\*\*\*

\*\*\*\*\*

それなりに友人も多く、自分は苦のない生活を送ってきたつもり。けれどあの子はそうではなかった。確か、父親の転勤のせいで次々と転校してしまうような子だったんだ。それゆえ決まった友達はいなく、あの子はいつも独りだった。

なんで自分があの子のことをこんなに気に掛けているか。それはあの子が自分の初恋だった、というのもあるだろう。そして気になつて仕方が無かったあの頃の自分は、躊躇いなくあの子に声を掛けたんだ。

「ねえ、みんなと一緒に遊ぼうよ」

3月25日。この日に丁度”5年生”が終わりになる。あの子はここでその日を迎え、5年生という年度に幕を下ろした。

そんな彼女にそう声を掛けたのは、『4月1日』にクラスメイトたちが集まって公園でかくれんぼをするという計画があったからだ。彼女は丁度その日に遠くへ引越してしまふ。それだから、ぜひ彼女にも参加して欲しくて話を振ったのだった。

同意という同意は無かったものの、その時は勢いで彼女を連れ出し公園へと向かった。無理やりではあったけれど、彼女は別に抵抗の意を見せなかったし、それでいいんだと思い込んでいた。

「じゃーんけーん、ほい！」

クラスメイトの数は32人。その中で”見つける側”なのは5人とルール付けられた。

”隠れる側”となった彼女は、他の連中の後を追って隠れる場所を探しに向かって行った。自分は”見つける側”となったので、木に顔を伏せて数を数えた。

「もーいいかい？」

口を揃えてそう声を上げると、あちらこちらから「もういいよー」と大声でも小声でもないようなトーンの声が聞こえてきたので、行動開始。

こちらにも5人いれば十分な搜索力になる。次々と見つかるクラスメイトたちは、公園中央の噴水前に束ねられて集まっていた。

「あと3人だよー！」

15分くらい経っただろうか。もうそんなに捕まったのか、と驚いたものの、その中にあの子がいなことに気付く。まだどこかに隠れているのか。

結局あの子は最後の一人となった。あんまり話しをしない大人し

い子だったので、そういう才能があるなんて知らずに。

「どうだー、見つかった？」

「うん。そっちは？」

その様子だとやっぱりまだ見つかっていないようだ。それほど広い公園でもないし、隠れる場所なんて限られている。

すると、すべり台の後ろに不自然な影を視界に捉える。真っ直ぐな斜体の影が、少しだけ出っ張って見える。

「見つけた！」

そう気取って言い張ってみたのだが……、

「あ、あれ？」

いない。ではさっきのは何の影だったのだろうか。

と辺りを調べてみると、すべり台の裏に誰が悪戯したであろうか、木の枝がビツシリと隙間に挟められていただけだった。

結局その後30分探したのだが、一向に見つかる気配すら感じなくなってきた。日もだんだん暮れてきている。見つけられたクラスメイトたちも、流石に飽き飽きしてきたようだ。

「もう帰っちゃダメー？」

「あの子だけ置いて帰れないよ、もうちょっとだから！」

自分はそうやって言い張った。苦い顔をされたが、あの子をどうしても放っておく事なんて出来なくて、ましてや好意すら抱いていたのもあった。

カラスが夕暮れに鳴き始めてきた頃。すべり台の影もブランコの影も横に伸びてきた頃だ。

「あっ……！」

彼女がいた。

いつ隠れたのだろうか、自分たちが数を数えていた木の後ろにいたのだった。灯台下暗し、とはまさにこのこと。

「……見つけてくれて、ありがとう」  
「えっ」

初めて、その子から声を掛けてくれた。  
「もう行かなくちゃ。引越し屋さん、来てるかも」  
予定の時間を遙かに越えてしまった。

彼女はちょびつとだけこちらの顔を覗き見てから、そこから走って家まで向かっていってしまった。けれど自分はただ立ち止まっているワケにも行かず。

「俺、大きくなったら会いに行くから！ 絶対！」

「……うん！」

夕陽の方へ駆けて行った彼女は、一度だけこちらを向いて大きく手を振ってくれた。他のみんなへは挨拶できなかったようだけど、この日で会うのは最後なのは今になって気づくんだ。

\*\*\*\*\*

\*\*\*\*\*

自分は今、その頃からの友人を連れてドライブを楽しんでいる。というのも、二人とも彼女なんてものはいなく、傷を舐めあうという意味でのドライブでもある。

「はあ、俺たちの運命の子はどこにいるんでしょーかねえ」  
助手席でラヴソングのCDを掛けながら友人は落胆気味にそう言った。

「運命なんてさ、その人とくっ付いたらそれが運命だよ」  
「……相変わらずお前は難しいこと言うなあ」

あれから自分は毎年、この日になると思い出す。絶対会いに行く

と、勢いだけでウソを言ってしまったあの日を、あの子を。

彼女がどこへ引越したのかは聞いていない。それに転勤先がコロコロ変わるそうなので、もはや手掛かりすら手が届かなくなってしまうた。

もう会えないけれど、夕陽を背に手を振ってくれたあの子の影は今でも忘れない。あの長々しく伸びた黄昏の影は、絶対に。

(後書き)

このお話は若干フィクションですが、少しだけノンフィクションでもあったりします。

皆さんにもこんな思い出はありますでしょうか。

とにかく読了ありがとうございます。2、3分ほどのお時間を頂けて光栄です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1153s/>

---

あの子にウソをついた日

2011年10月7日02時34分発行